データで見る、むし歯・歯肉炎の実態

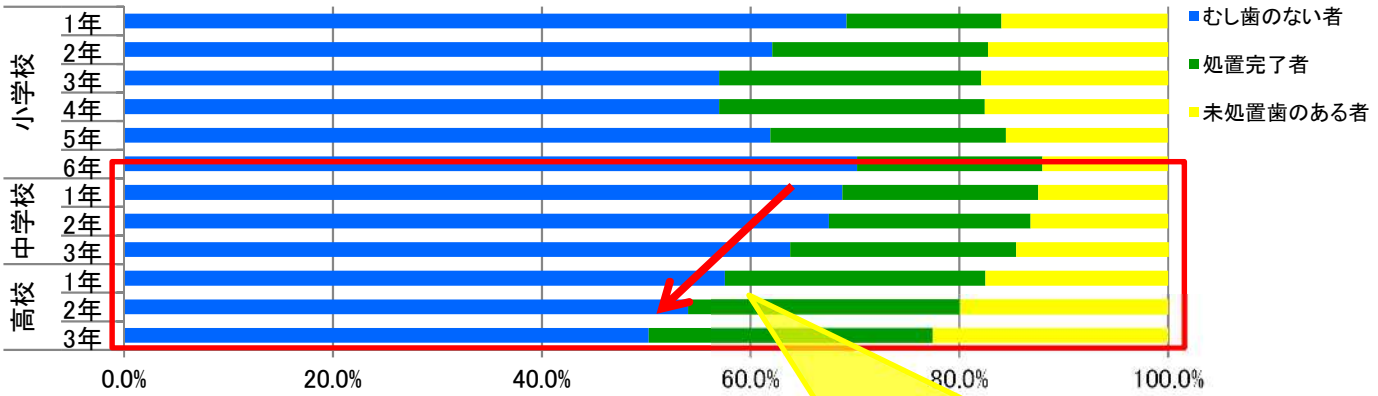
混合歯列期は歯みがきが難しい

子どもの歯と大人の歯の両方が生えている時期を混合歯列期といいます。
6 歳ごろから永久歯が生えはじめ、12 歳ごろまでにはすべて永久歯に生え変わります。
混合歯列期は歯並びがデコボコなので歯みがきの際には歯ブラシの当て方に注意が必要です。

12 歳以降にむし歯が増える

生えたばかりの永久歯は未成熟で弱く、むし歯になりやすい状態です。
12 歳から 17 歳にかけて、むし歯のある者の割合がどんと増えていて、永久歯が生えてから比較的短期間にむし歯のある者が増加しています。

むし歯のない者の割合（東京都）



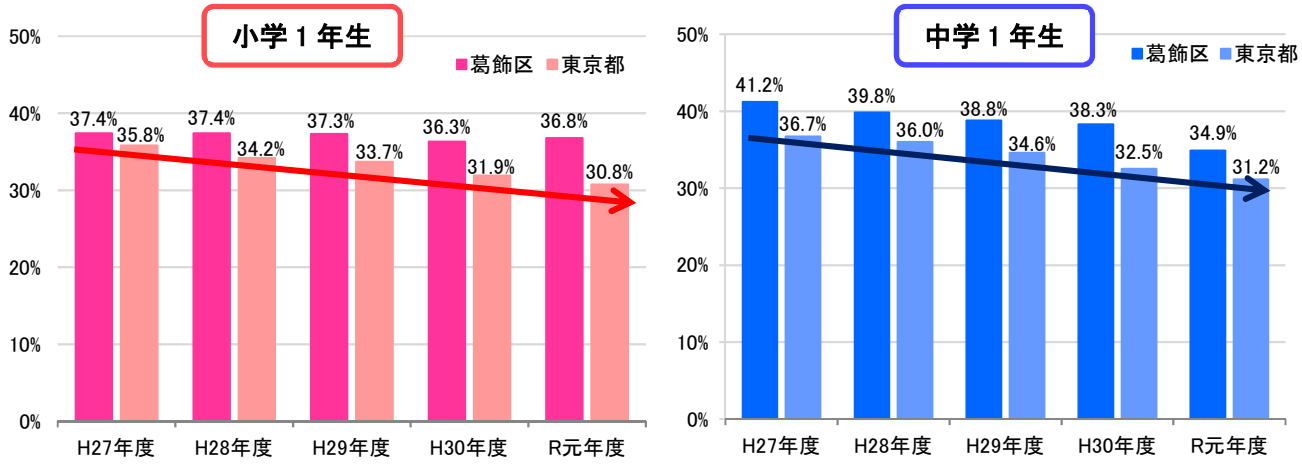
出典：東京都「東京都の学校保健統計書」(令和元年度)

中学生になる頃からむし歯のない者の割合が少なくなり、むし歯がある者(処置完了者+未処置歯のある者)の割合が増えている。

葛飾区の現状

小学 1 年生および中学 1 年生のむし歯がある者の割合について、東京都よりも葛飾区は高いですが、経年変化でみるといずれも減少傾向にあります。

むし歯のある者の割合



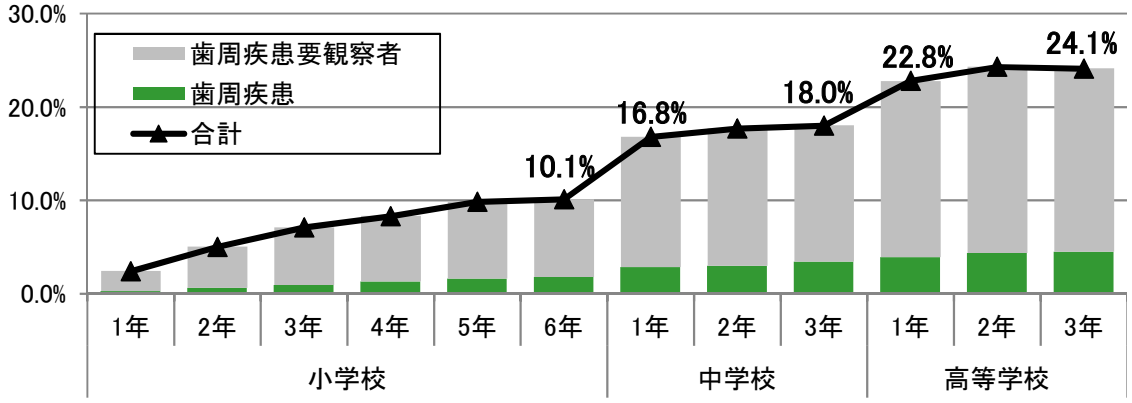
出典：東京都「東京都の学校保健統計書」(令和元年度)

学齢期の歯肉炎の特徴

歯肉炎の原因はプラーク中の細菌ですが、特に小学生高学年や中学生は、ホルモンが大きく変化し、歯肉炎が起こりやすい時期です。
このホルモンの変化に反応して、ちょっとしたことでも歯肉が炎症を起こしやすくなったり、炎症が強く出やすくなります。
またホルモンに加え、生え変わりの時期で歯並びも一時的に悪くなるため、歯みがきが難しくなるということもあり、歯肉炎になりやすい条件が重なっています。

学年が上がるにつれ、歯肉炎にかかるお子さんが多くなっています。これは生活習慣の変化が起こったり、ホルモンバランスが崩れやすい時期と重なることが原因と考えられます。

歯肉に炎症がある者の割合（東京都）

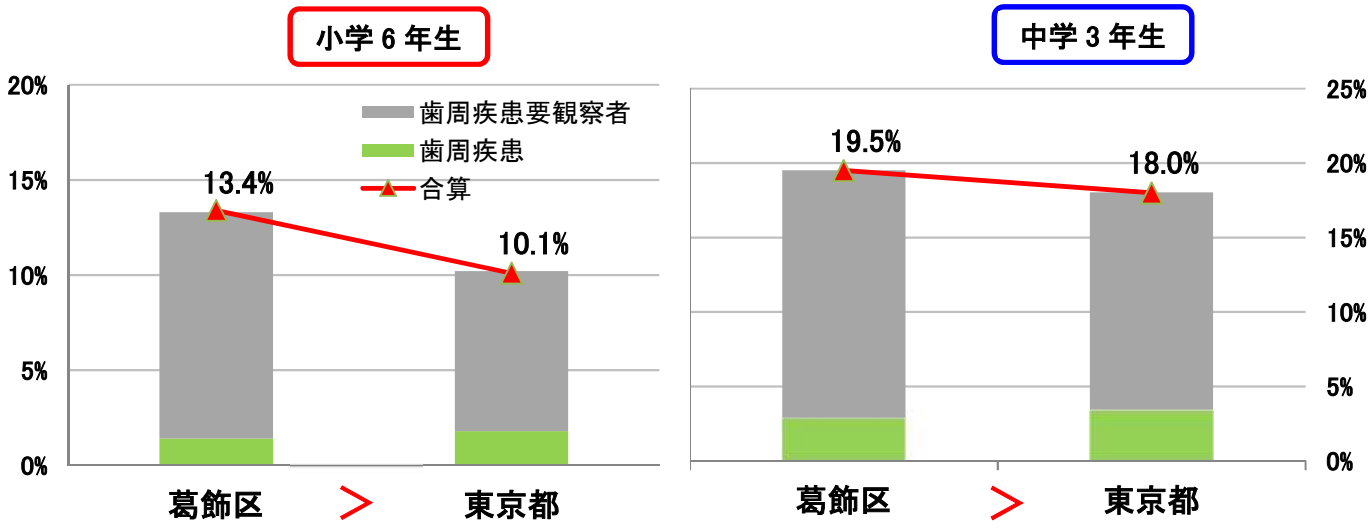


出典：東京都「東京都の学校保健統計書」（令和元年度）

葛飾区の現状

歯肉に炎症がある者の割合について、小学 6 年生と中学 3 年生においてはいずれも葛飾区の割合は東京都より上回っている。

歯肉に炎症がある者の割合（葛飾区）



出典：東京都「東京都の学校保健統計書」（令和元年度）

歯医者から足が遠のく学齢期

かかりつけ歯科医をもつ者の割合（東京都）

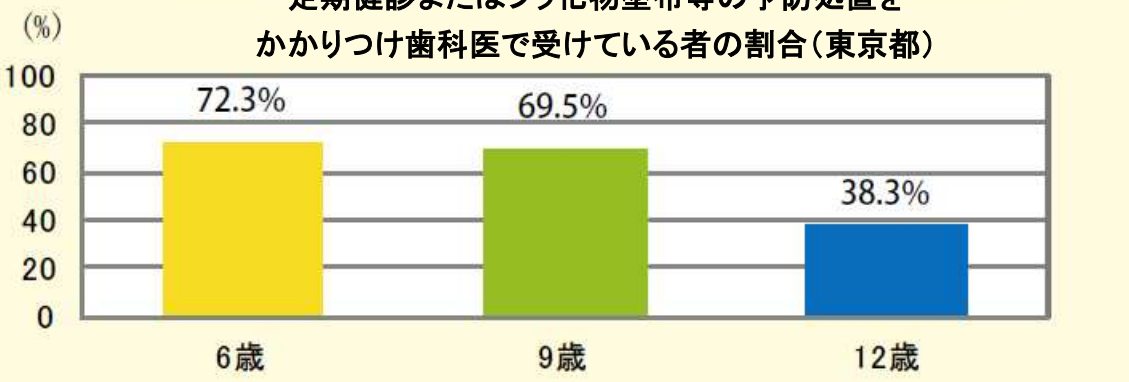
	平成11年度	平成16年度	平成21年度	平成26年度
6歳	75.1%	76.5%	78.9%	81.2%
9歳	69.4%	71.4%	79.5%	83.5%
12歳	48.4%	48.4%	58.9%	57.6%

出典：東京都「幼児期・学齢期歯科保健行動調査」(平成 11,16,21,26 年度)

平成 11 年度に比べると、どの年齢も平成 26 年度にはかかりつけ歯科医をもつ割合は増えています。しかし年齢別で見ると、12 歳は 6 歳および 9 歳に比べてかかりつけ歯科医をもっている子どもはぐっと減っています。
年齢が上がるにつれ保護者からの自立が進み、さらには勉強や部活動など忙しくなる場合も多く、歯医者から遠のいた生活になりやすいです。

またかかりつけ歯科医で、定期健診やフッ化物塗布等の予防処置を受けている者の割合は、年齢とともに減っています。

定期健診またはフッ化物塗布等の予防処置を
かかりつけ歯科医で受けている者の割合（東京都）



出典：東京都「幼児期・学齢期歯科保健行動調査」(平成 26 年度)

定期健診はむし歯や歯周病を早期に発見できるほか、生え変わりの途中にあって複雑な歯並びであるこの時期に適した歯みがきの方法を教えてくれる貴重な機会です。
またフッ化物塗布は、特に生えたばかりの永久歯のむし歯予防に有効です。

一般的に大学生や社会人になると歯科健診を受ける機会は極端に少なくなります。
学齢期にむし歯や歯周病の原因と予防に関する理解を深め、生涯を通じた口腔ケアの習慣や生活習慣の基礎を身に付けることが大切です。